

ドキュメンタリー映画 「ヒマラヤの青い空と白い雪がくれたもの」

2016年春、一人の知的障害者から「僕たちもエベレストに登れますか」と訊ねられた。これまで10回以上のヒマラヤ経験がある私でも、それは不可能だった。「死ぬよ。でも練習すればヒマラヤのトレッキングはできるかも」と半分冗談のように返事した。

翌月、私がプロデューサーとしてかかわっている知的障害を持つ人たちの事業所「パンジー」に、1枚のポスターが張り出された。「ヒマラヤに行こう。山岳部員募集」。その時から彼らの挑戦が始まった。当事者も支援する職員も登山の経験は皆無。それは無謀とも思える挑戦だった。私にとっても、知的障害者と登るのは初めてだった。しかし、彼らの思いに強く魅かれた。いくつかの壁にぶつかるだろう。それを乗り越える方法は必ず見つかる、と。

まず始めたのは山を体験することだった。初めての登山は生駒山。標高差わずか600m。次は、もっとハードな葛城山から金剛山の縦走。初めての体験に辛くて泣き出す者、山道が怖くて歩けない者、途中で山から下りる者。それでも、回数を重ねる中で、少しずつ自信をつけてきた。

2018年10月。モンスーンの明けたネパールに向かった7人の知的障害者は、重度の知的障害、重い自閉症、強度行動障害、ダウン症など様々な障害を持っている。目指すのはアンナプルナ(8091m)のベースキャンプ(4200m)。彼らを持ち受けていたのは、想像をはるかに超えたヒマラヤの厳しい現実だった。長いつり橋が怖くて泣き出す者、標高差300m以上の石段を見て動かなくなる者、初めての環境に対応できず発作を起こす者、低酸素で下痢や嘔吐、頭痛に襲われる者。次々に襲いかかる試練の中で7人の知的障害者も支援者も一瞬一瞬、命に向き

合っていた。当事者の障害の質、性格、これまでの2年半に積み重ねたデータを毎日分析した。頭の中では緊急時に対応するシミュレーションをいつもしていた。

そして、6日目の朝。アンナプルナI峰を見つめるメンバーの眼には強い意志が感じられた。空気は平地の3分の2。気温は氷点下。誰一人泣き言を言わなかった。みんな前を向いて登った。ベースキャンプに着いた時、誰もが輝いていた。そして、メンバーの一人が泣きながら言った。「みんなの力があったから」と。

知的障害者がヒマラヤに挑む。その姿を映像で記録しようと準備の段階からカメラを回した。撮った映像はおよそ70時間。それを1年半かけて仕上げたのが「ヒマラヤの青い空と白い雪がくれたもの」だ。作品にはナレーションはない。知的障害者を持つ人をできる限り何のフィルターも通さず見て欲しい。何の先入観も持たずに感じて欲しいと思ったからだ。映画を見た人からこんな感想が寄せられた。「こんなに障害の重い人がヒマラヤに登れるのだろうかと思った。ところが日に日にみんなが変化していく。そして、最後には誰が障害者か健常者かの区別はなくなった。彼らも一人の人間なのだ」と。この映画の中の7人の姿から、これまでとは違う知的障害者への眼差しを見つけて欲しい。一人の人間として。

ヒマラヤから半年後、山岳部に新しいメンバーが入った。その最初の山行。後輩に呼吸の仕方や歩き方を教え、難しいところでは手をさしのべるヒマラヤのメンバーの姿があった。

(パンジーメディア エグゼクティブプロデューサー
小川道幸)